

265

特240  
235

# 内田信也 疑獄秘話

と

10

編社信通演講本日

1



0004609-000

特240-235

内田信也と疑獄秘話

石田三郎・著  
日本講演通信社

昭和11

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著作  
第67条の規定に基づき、平成12年3月  
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの



特240  
235

# 街頭パンプン

軍部に告ぐ 齋藤隆夫述

軍の決意 松本富雄著

二・二六事件の真相 日本講演通信社編

米穀商は没落か 岩木哲夫著

何故に電力を國營にするか 頼母木桂吉述

なぜ電力國營に反對するか 電氣協會編

革命のスペイン 阿部直之助著

南進論とは何ぞや 長谷川了著

廣田内閣はいつ迄続くか 石田三郎著

石田三郎著

内田信也と疑獄祕話

日本講演通信社發行

日本講演通信社發行 定價拾二錢 送料二錢



# 内田信也と疑獄祕話

## 目次

一、政治家と金……………	四
二、袖の下の誘惑……………	六
三、小川平吉……………	八
四、百圓札で紙鶴を折つた時代……………	一〇
五、濱の真砂と疑獄……………	一二
六、内田前鐵相收容の發端……………	一五
七、大物續々と檢舉さる……………	一八

八、内田氏と土木協會……………	二〇
九、肅鐵と縣議戰……………	二三
一〇、政治献金の正體……………	二五
一一、談合と請負業者……………	二六
一二、濡手で粟の掴み取り……………	三〇
一三、内田氏の經歷……………	三一
一四、五私鐵事件の全貌……………	三三
一五、政黨凋落の秋……………	三五
一六、小川氏と内田氏の比較……………	三六
一七、奇しき因縁魔の邸宅……………	四三



# 内田信也と疑獄祕話

石田三郎

## 一、政治家と金

政治家に金が無くなつて融通も利かなくなつてしまへばカツパが陸へ上つたも同然、何が出来るものか、政治は金なくして出来るものぢやないと云ふ様な、ド偉く、達観した様な、それで極めて俗っぽいのか、譯がわかりすぎた様な、理窟では無い様な事を云つて居た老政客が有つたが、何となくそんな感じがして來た。

疑獄の起る度にその感が何となく胸を打つ、最近次から次へと捲き起る疑獄が判で捺した様に政治家とか政黨人とか云はれる人が中心をなしてゐるのを見ても老政客の言、決つて出鱈

目でないと思はせられる。

金が仇の世の中、地獄の沙汰も金次第と云ふことを昔の人は現在の世に至る迄成る程と肯かせる様な諺を残して行つて呉れたもので現に今問題となつてゐる國鐵疑獄事件などは正に地獄の沙汰も金次第にしてやつたばかりに内田信也その人が自分自身が自分の手をうしろに廻してしまつた様なものだった。

肅鐵、肅鐵、なんて云つたのは、一時何處の誰れと云ひたくなる。大臣となつたこんでホコ／＼になつて喜んで、鐵道と云ふところは利權の多いところだから、利權屋は一切近づけん、大いに肅正をするんだ、談合は絶対に不可ん談合屋は絶対來るな札つきの請負業者門を入る可からず式のきびしいおふれを出して肅正を叫んだものが今市ヶ谷に收賄と云ふ罪で放り込まれた内田さんなんだから人間の口と心なんて良い加減のもので全く皮肉の感湧かざるを得ない。札つき請負業者門を入るを許さず式のお達つし同様の憂目を見たのが請負業者、今まで何のかのと鐵道工事の請負をさせて貰つてゐた身が、内田さんの大臣になつてから急に入るを許さ



すなどと云ふ事になつては、全く地獄へ追ひやられたも同然だつた。そこで彼等も先哲の言をおそまきながらも思ひ浮べた。地獄の沙汰も金次第、此の邊で、黄金に物を云はさせにや、云はさせる時がないとばかり、黄白をばらまくこと二十萬圓その効目は誠にあらたかで、當の内田元大臣も急に相恰を崩して、とたんに肅正の心境ががらりと變化してしまつて、あゝよしよし、袖の下なら何でも宜しい來るものは決つして拒まんと云ふ様な事になつて到遂國鐵疑獄事件の最高峰とか何とかちやん／＼書かれたり生き恥を晒らすと云ふ所に迄すべり込んでしまつたと云ふのが今度の國鐵事件の外廓線と云ふ譯だ。

## 二、袖の下の誘惑

一たい疑獄にどうして政治家と言はれる様な人とか政黨人とか云ふ人が一枚加はるのか、何故に疑獄は起るんだらうと云ふことを誰れでも一寸わかる様で仲々わかりにくいものだ。以下今までに既に斷罪された事件乃至は此れから斷罪されるであらう事件に就いて説明して見や

う。

冒頭につまらない言葉ではあるが、政治は金なくして出來ない、政治家に金が無くなればカツパの陸上行進だと云ふ言葉が、疑獄に政治家が一枚も二枚も加はる根本ぢやなからうか。

何にしても最近迄に起きた疑獄事件では、政治家の加はつてない事件と云ふのが一つとしな

いのに見ても明かだ。  
従つて一言で云へば、疑獄の根本原因は皆黄金慾の突張つた政治家が、斯うしてもわかるま

いと云ふ世の中を甘く見て見損なつた連中の誤つた思想から生れて來るものと云へやう。  
思想なんて七・六つかしい言葉で聊か何では有るがまあ全くの所そやう云ふ見損ひをする見違ひの人々が次から次へと出ることには國家の爲め甚だ悲しまざるを得ない次第である。勿論、疑獄とか、瀆職とか云ふ事件に金の授受、收受がない譯はないのは云はなくとも當然のことだが、然らば何故に金を袖の下からこつそりと差し上げるか、何故に取つては成らぬ取れば罪になる、法律に引つかゝると云ふことがわかつて取るかと云ふ事になる。茲に極めて微妙な人間



の心理作用つてもものがある。

何せ一方は金が差し上げて困つてゐる所へ、一方は金が慾しくてたまらぬと云ふのがあつたとしたならその慾しくてたまらぬ御人が國家の官吏であり何かその金に結託をつけて差し上げれば、差し上げた方は贈賄、受け取つた方は收賄の罪を構成することはわかり切つてゐる。つまり早い話が、今度の鐵道工事を私に何とか請負はして呉れませんか。若し請負はして下さるならばこれ／＼だけ誠に輕少ですかと、金三萬圓也を差し上げたと假定してその許可の實權を握つてゐる大臣が、宜しいお前は多分に話がわかる。今度の請負はお前にさせてやらうと云ふことになれば即ち、此れが贈賄であり收賄の序の口が開けたと斯う云ふ譯のものである。

### 三、小川平吉

此れをやつて引つかつたのが即ち昭和の五大疑獄の最大のものとして人々を驚かしたあの小川平吉の五私鐵疑獄事件だつた。五私鐵疑獄事件は鐵道を敷設するから認可して貰ひたい、

それを許して下さいれば袖の下幾ら差し上げますと云ふ餘りにもはつきりし過ぎた事件だつた。

此の鐵道は儲けが少くてどうにも困り持て餘して居りますが國の費用でどうか買ひ上げて下さいませんか、若し此れ／＼の値で買ひ上げて下さるならば、此れだけの袖の下を差し上げます、ちやそうしてやらう、ちやに歸つてその金を持つて來いと云つたはつきりした事件だつた。

今度の内田の事件は此の小川氏との事件とは少し趣きを異にしてゐるとは云へ、大體に於て賄賂を取つたと云ふ點は同じことであつた。

小川とも有らう人が、内田とも有らう人が三萬や五萬の目腐れ金に目をつける程、金が無いのかと思ふ人が有るだらうが、成る程、口ちや三萬五萬だが、偕て必要缺く可からざる時に金の無い程つらいことは有るまいし又、口で云ふ程にたつた三萬、高が五萬と云ふ人にそれちや五萬圓持つてゐるかと云つたら、びた錢、一文も出せないと云ふ人の多い世の中なんだ。

小川氏が收賄した額は六十萬圓とも云はれ七十萬圓とも云はれた。



今日の内田氏の金は十五萬圓とも云はれ、乃至は廿萬圓とも云はれ乃至は確實の所八萬圓とも云はれ新聞の報するところは各新聞に依つて皆まち／＼であつた。

從令八萬圓でもあの内田が取つたのか、一時何千萬圓も有つたと云ふ内田がとつたのか、そんな金が無い譯ぢやなし、とんでもないものに手を出して大やけどしたと云ふ勿れ。

それだから世の中は目あき千人盲千人と云ふ。

#### 四、百圓札で紙鶴を折つた時代

内田は世間の評判ではど偉い大金持ちの如く云はれてゐた。

そりや、そう云ふ時代もあつた、わしは神戸の内田ぢや、金は何ぼでもやるから助けて呉れと汽車が東海道線で引つくり返つた時喚き叫んだ程、金のうなつてゐた時代もあつた。百圓札でお酌に出た半玉の姐さんに鶴を折らせてそれを二つ三つ宛、持たせて歸したとか金貨を吸物の椀の中に三つ四つころがして客へ出したとか成金の心裏はわしらにはようわからんと憤慨させ

た時代もあつた。

だが甚だ失禮の話ではあるが最近の内田氏のふところ具合は決してそんな昔の様なものではないと云ふことは事實であつた。

彼れが鐵道大臣になつた當時、あれは金がうなる程有るんだからそれお祝ひの一言を云つて百圓札で頬べたを撫でられてかへらうなどと、淺ましい考へを持つて金缺亡者がわんさと押しかけたものであつた。

此れが御祝ひの一言はどうか淀みなく述べ終つたが、いやどうも有がとうその中に又來て何かと面白い話でもして呉れ給へ、今日は一寸多忙でちや此れで失禮、なぞと、客がまだ歸るとも何とも云はない中に失禮なことを云つて追ひ返したと云はれてゐた程で金貰ひと思ふ奴はほとんど秘書が追ひ拂ひ役として汗を流してゐたと云ふことをその道の通人は誰れもが知つてゐた。

あの派出好きの彼れが此れ程になつたのであるからには金には餘程、困つてゐたのであらう



ことが察せられる。

で結極話は本筋へ戻るが、金がなく何とかして自分の部下、配下、乾分を育て、行こう面目を維持して行こうと云ふところに金の必要にせまられて来る、と云ふ極めて常識的の見方で疑獄の真相原因淵源と云ふものゝ法定式が解けるではなからうか、

今回の疑獄事件が起るに至つた始めから終り迄の経緯と色々のいきさつ並びに昭和の時代に至つてから起きた多くの鐵道疑獄事件の全貌を記して説明することゝしやう。

## 五、濱の眞砂と疑獄

濱の眞砂はつきるとも世に疑獄の種はつきまじ、と云つた様な言葉か乃至は辭世見たいな文句が世の中の人々の口に上りそうの世相に心有る人々は此の醜狀に啞然としてゐる事では有らう。それ程、次から次へと疑獄事件が勃發して來た、今更の言葉ぢやないが惡の根絶やしは至難中の至難事かも知れぬとはいやはや慨嘆の至りに堪へぬ。取り分けて昭和の時代になつてか

ら此の醜狀が白日下に暴露されて來たものが頗る多かつた。

曰く越鐵、曰く山手、曰く五私鐵、即ち、北鐵、灣鐵、東大軌、奈良鐵、伊勢鐵、續いてその餘儘まだ消えやらぬ中に又しても國鐵疑獄事件の登場となつた。

小川平吉氏の罪が確定して刑務所入りをするから俺れも一緒にお伴でもしませうかと云ふ譯でもあるまいが相前後して刑務所入りをした従三位勳二等代議士と云ふいかめしい有位、帶勳肩書きつきの内田信也氏も獄中に周圍の人として始めて大悟した事であらう我れあやまてり、と、事もあらうに會つては國務大臣の榮位にあつた人が收賄罪に依つて起訴されて刑務所入りをしたと云ふ事實此の醜いとして悲しむべき矛盾と剝ぎ取られた假面とを國民は一體、何と見るであらう。餘りにも疑獄事件の連続で國民としても只々啞然たらされ一點の朗らかさをも得られないことを悲しまざるを得ない。

昭和五大疑獄と云ふ大きな疑獄事件があとも先きにも、此れで終りだらうと思つてゐたに豈はからんや、どんでもないところから尻尾を出して來たのであつた。あの小川平吉氏の捲き



起した五和鐵事件は何と云つても大なることは天下一であつたであろう。先に悄然として淋しく市ヶ谷行きをした小川平吉氏、内田信也氏いづれも鐵道大臣在職中に起きた事件である。

源平物語りの中にもあつた文句だが、祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色は、盛者必衰の理を顯はす、奢れる人も久しからず、只春の夜の夢の如し、猛き者も遂ひに滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ

まあ斯う云つた感じがないではない、山手、越鐵事件でも小橋氏は最初可なり瀆職としての嫌疑も濃厚であつたと云はれてゐたが公判に於て青天白日が證明され無罪の判決となつた。その次ぎが例の小川平吉氏の五私鐵の事件であつた。

一審に於ては無罪であつたが控訴院では有罪の判決となつた。此れに不服で小川氏ら有罪の判決を宣告されたものは一樣に大審院に上告したが、大審院でも遂ひに有罪と認定されて上告棄却となつてしまつた。

小川平吉の五私鐵疑獄が大審院で無罪が然るべきものと争つてゐる頃からチヨイ／＼とお

次ぎの新しい鐵道疑獄らしい姿をしたものが尻尾を見え隠れさせる様になつて來た。

## 六、内田前鐵相收容の發端

此の疑獄の尻尾も一寸見え隠れして來たからと云つてまさか今回の此の事件に成らうとはよもや誰れも想像もしなかつたことであつた。

全貌を現はしたところで蛇でも有るまい大蛇でも有るまい、鬼でも有るまいと高をくゞり、泰山鳴動して鼠一匹の類か位に思つてゐたが然し時折り尻尾だけでなく大きな胴體を見せ始める様になつた。

ほう此れはどうも、萬更馬鹿にも出來ぬと注意して見る様になり時折りチラリホラリ胴や手足様のものが見えかくれ始め頭もどうやら近い中には判明すると云ふところまで來ると、此の疑獄の正體は只者でなく意外の大事事件ぢやないかと思はれる様になつて來た。即ち事件的に見ると昭和十年の十一月七日芝の高輪臺小學校の新築に際して區會議員が、請負業者から多額の



金員を賄賂として收受したことがそも／＼此の事件が尻尾を出し始めたのであつた。

偕て尻尾を出し始めてそれを引摺んだ以上頭迄出させるのは當然、檢察當局としては國民の幸福の爲め苟くも不正ありと見たる以上不正者の摘發は何の許すところもなく徹底的に檢舉の手を延ばし始めたのであつた。

越えて十一月廿二日に元芝の區役所に勤務して赤坂區役所の庶務課長に轉じて來た百鳥喜一と云ふものが檢舉され續いて同月三十日芝區會議員の高橋一心と云ふ男が檢舉され十二月十一日に市の土木課に飛火して土木局庶務課長の黒川一治が檢舉され芝區建築技師牧野某その他崎某足立區會の副議長西澤某、等々相當に始まり始めた此れがその儘で治まる筈もなく、取調べの結果は今度は青山師範の移轉新築へと飛火してしまつた。

請負者との間に黄金の袖の下取引きが數萬圓あつたとか有るとかと云ふ嫌疑で先づ府の總務部營膳課長鶴飼長三郎、續いて同課の技師遠藤某が十二月廿二日に檢舉され十二月廿九日に請負業者の戸田組の秘書縫谷、平野組社長井野某、竹田組常務花井某吉田組社長吉田某等々ぞろ

／＼と請負組が姿を現はして來た。

事件は次から次へと芋づる式に府立高校の請負、府立第八高女、同女子師範と云ふ様に事件が擴大されて行く一方であつて十一月四日には此れらの新築に請負者と宜しくやつて數千圓の金を懐ろに入れてあたゝめた東京府の營膳課の係長連が二三人も珠數つなぎにやられて次から次へ全くはてしなくなつて來た。市の關係區、府の關係の瀆職事件に大嵐が次きまくつて總勢請負者三十八名も大量的にやつて尙まだ何處に飛火するか測り知れない有様であつた。脛に傷持つ者は内心恐怖の日を送り迎へしてゐる中にいつしか事件は談合屋に飛火しそうな形勢が見え始めた。

つゞいて鐵道の方面にも火の手が上がりそうとなりあたかも燎原の火の如く、あそこからも此處からもと云ふ疑ひを持たれるものゝみ多くどうやら此れこそ大事件の相を備へてゐるものと見られるに至つて來た。然るに本年の五月二十日遂に鐵道に火の手が上がり始めた。

即ち大阪鐵道局工務課長が檢舉されつゞいて大鐵局工務課改良係長が檢舉、五月廿六日には



本鐵工務課長で勅任技師古谷某が召喚され五月二十八日には鐵道省工務局長勅任待遇技師工學博士、平井喜久松（五二）氏の登場を見東鐵と云はず大鐵、門鐵と云はず本省と云はず至る所に疑惑中の人物が續々と現はれるに至つた。

何にしても勅任級の人物がチヨイ／＼と疑獄の渦の中に姿を見せて來る様になるとやつぱり此の事件の正體は頭まで見なければ承知出來なくなつて來た。相當の代物で一吋やそつとのお化け式のものぢやなく本當の疑獄事件となつて來た。登場する人物凡て七十餘名、請負者あり役人あり、種々雜多であつた。

時折り思ひ出した様に勅任級の人物、えら物をちよい／＼と檢舉して如何にも大きな胴を見せ始めて來るので此の頭こそ大したものと思つてゐた。

## 七、大物續々と檢舉さる

新聞では、やれそれ貴族院議員の飛鳥文吉が、警視廳に留置された、林米七がやられた田中

恵が、湖松茂吉がやられたと毎日の様にデカと／＼初號活字にセンセショナルに書き立てた。

その中に昭和會の前代議士難波清人氏が召喚されたと報ずるや、次は一齊に鳴物入りで愈々某々前大官の召喚を見る模様と大きな音をあげる様になつて來た。はつきりと何の誰れそのの召喚と書かずに覆面させて某大官と鳴物入りで書き立てたから此の事件が全く某大官の身邊に集つたかの感になつてしまつた。

某大官の召喚必至と云つた言葉が愈々内田信也とはつきり四つの文字となつて現れ、此の疑獄の大頭が前鐵道大臣代議士從三位勳二等内田信也その人であることがはつきりして來たのが十月三十一日午前であつた。

それまでの一週間と云ふもの某大官と覆面をつけてさきもさきも勿體振つて知らぬものは某大官は一體誰れのことか薩張りわからず、見當は大ていついてゐるが、一體誰れかねなぞと負け惜しみを云ひつゝその人物の正體を掴みたいとあせつてゐた。

某大官にも色々あらあね、大概にしてはつきりして貰はうぢやないかと中腹になりかけたこ



ろやうやくにして内田信也と云ふ名がわかつて来たのであつた。

凡そ尻尾が出たのが昨年十一月七日、大頭が出るまで約一年、本年十一月七日で丸一年の間よくも根氣よく尻尾から胸、手足、頭と引きすり出したものと只々當局の努力と苦心に敬服する。今年の國鐵の大詰めは正しく来る所まで来て終つた。

## 八、内田氏と土木協會

偕て内田氏と談合の土木協會員との因果關係は一體どうあつたのか。

内田氏の取つた收賄額は一體何程か、どうして此の疑獄が起きたのか、内田氏の人と成りは一體どんな男か一應順を追ふて説明して見やう。

内田信也氏召喚を受け取調べを受けると云ふ號外の鈴の音が市民の耳にひびき渡つた時あゝやつぱり彼れも金につまつたかと嘆聲を洩らした人も多分にあつた事であらう。一方には又、彼れ金の光りに遂ひに眩惑されてしまつたかと彼れの不甲斐無さを慨嘆した人も有つたであら

うが、いづれにしても起訴されたことは事實である。三日の夕刻當の内田氏は再度の召喚の電話を受けるに至つた。

此れより三日前の十月三十一日の十五時間に亘る取調べを終つて歸宅を許された時、訪問した新聞記者に對していづれは四日にわかるよ、うは……と内田一流の豪勢な笑ひをしたとか、その笑ひの顔にいつもの内田の元氣が失はれて一沫の淋しさが有つたと云はれてゐたが、その日既に四日はのがれる可くもなく第一段階の運命が別れる事を承知して何もかも四日になればわかると云つたのか、それとも一點、疾ましい點もなく、一切の疑雲、暗雲が内田の身邊から消えるのだと云ふ意味がわからなかつた。

四日再度召喚をうけ、早朝に東京地方検事局に出頭した内田氏は早速待ち受けてゐた検事から、飛島文吉、田中恵、林米七氏らとの關係を訊問されたのであつた。が然し金錢の收受關係に就ては強硬に否認を續けたが、既に當局が月餘に亘つて詳細なる取調べと證據がためを行つて来た上の事として如何とも嫌疑の晴れ様が無かつたのであつた。



一切の取調べが済んで司法大臣の稟議を経て上奏し起訴の手續きを完了して主任検事から、疑惑は依然として濃厚で諸般の取調べの結果、起訴する旨を云ひ渡した時内田氏は事茲に至れば如何とも已むなしと思つてか、已むを得ないと述べ、自宅から届けられた和服に着換へた。時ちやうど、白聖の議事堂が夜のライトに照らされて夕闇の中にぎ然としてそびえ立つてゐるのを感慨無量の面持で眺め入つてゐたのであつた。若し内田が何らの疑ひを受けることなかりせば此の記念さるべき議事堂の第一回の帝國議會の榮有る席に堂々と列つし得たであらうが内田として感慨無量なる事は申すまでもない事であらう。そも／＼内田氏が土木協會と因縁づけられる様になつたのは鐵相として就任する時から既に運命づけられてゐた。

## 九、肅鐵と縣議戰

岡田内閣に鐵相と云ふ思はぬ幸運に夢かとはかり喜んで早速引き受け、時あたかも非常時で

有るが故に先づ／＼何を置いても肅正を第一とせにやならんと云ふ氣持ちになつた。其の第一歩として、鐵道省の指定請負人である土木協會に對して斷呼として廓正の手を染めた。

由來、此の指定請負と鐵道省とが古い傳統的惡因縁を持つてゐるのがいかんと云ふわけで此れに對して斷呼として彈壓を下したまでは大出來であつた。その第一着手として當時建設の局長であつた池田嘉六氏を無理矢理に交送せしめ更らに請負業界の大御所と云はれてゐた前田榮次郎氏と鐵道省から出入止めしてしまつた。

協會の願ひはそつばむいて知らんよとてんで取合はうとしなかつた。此處までは誠に大出來だつたが、弱つたのは請負業者であつた。此んなつもりぢやなかつたが、此れではてんで手も足も出せん、何とか御機嫌の直る方法はなきものかとしきりと智恵を絞り出したのであつた。先づ何と云つても協會の方としては從來の様に「指名」及び請負金額の査定の點などで非常に困つて何とかして内田氏に接近せんと策をめぐらして來た。

所が内田氏は小なりと云へども昭和會の一方の旗頭だ、時あたかも縣會議員の總改選があつ



一ヶ月と云ふ具合に迫つて来た。

金の有る筈の内田氏はまさかには縣會議員の選舉に自分の乾分たちにやる金が無い譯のもので無いと思つたのに、どう云ふものか、金が入要となつて来た。

最も金と云ふものは幾ら有つても邪魔になるものではないから、貰ふ分には貰つて置いて悪くはないであらうけれども、いづれにしても内田氏から云つたものか、乃至は土木協會から云ひ出したものか、縣會議員の選舉費用としてつまり政治獻金の名のもとに土木協會の連中が金の工面をやり出した。

結極協會側ではリーダー格の飛島、田中、林等の中で五萬圓の金が出来上つた。其處で昭和十年の八月あと一月で縣會の選舉がはじまると云ふ時に、飛島氏から、昭和會の代議士難波清人氏の手を通じて獻金された。此れが内田氏の選舉母體である茨城新政クラブの政治資金となつて行つた。

## 一〇、政治獻金の正體

その次ぎには十一年の二月中に衆議院の總選舉が行はれることとなり、前回の腐れ因縁が物を云つたのか、土木協會の人々から難波氏の手を通じて選舉費用として獻金されるに至つた。

茲で問題とするのは單なる政治家に獻金するのは何ら法律的に問題とする譯もないが、職務權限を金に依つて左右すると云ふ請託關係が有ると法律的には瀆職罪を構成して來ると云ふのである。

檢察當局の疑惑の眼を以つて見た點は即ち鐵道省の獨占的工事請負をなさしめると云ふ請託あると見たのであらう。

勿論何人であらうとも十萬十五萬と云ふ金を只單に宜しく使つて貰ひたいと云ふ者はないことは常識的にもわかる事だ。此の金を宜しく御納め願ひたい、然うして私たちの仕事についてはどうか出来得る限り御助けを願ひますと云ふ交換條件が、無言の中であらうと云ふもの。



口に出して約束すれば尙更明瞭に請託のあつた事になる。結極此の御助けを願ふ、俺れの権限内なら宜しくやらうと云ふ有形にしる無形にしる、請託關係ありと睨めばそこに深い疑惑が生まれて来る譯である。

第三回目には十一年の一月飛鳥氏から、自己の選挙費用として三萬圓の金を收受したと云ふ疑惑の點が結極内田を遂ひに行くとところ迄行かしてしまつた。

此の三點が、鐵道工事の指名と、落札に對する便宜供與となり鐵道大臣として職務權限に關するものでその間に難波氏が金錢の受取に介在したとしても瀆職の疑惑は當然受けなければならぬ譯である。

## 一一、談合と請負業者

由來談合と云ふことは古くから請負業者間に行はれて來たもので、此の談合と云ふものには必ず談合金と云ふものが影の如くつきまとつてゐるのが通例であつた。

請負業者と、鐵道省の因果關係は可なり古くからあつた。鐵道省が建設工事や改良工事に費す金は實に一ヶ年二億圓に上ると云はれて居た。たとへば旅客が一錢不足してもまけて呉れず、正規の料金を拂はんことには何處へも行けるものでない。

斯うした料金から収入となる鐵道省の収入金の三分の一は建設、乃至は改良と云ふ工事費となるのであつた。此の工事請負へばそこに何萬かの儲けは有ると見るのが常識だ。

まさか如何に大金持ちの請負者であらうとも、身錢を切つて損までして請負ふと云ふ事は有り得やう筈がない。

儲けの無い工事を誰れが請負ふものか、そこはそれ商賣だけに實に如才もなくちやんと二一添作の五とそろばんをはじいてから請負の入札をするのだ。そこで何とか大工事を請負はして貰ひたいと念願する様になつて來る。従つて成るべく自分たちの儲けになる様にとそれ〴〵猛烈な運動が始められ、従つて今回の様な國鐵疑獄なんて醜狀が出て來る譯だ。

此の事件で平井勅任工務局長がやつぱり入れられ黒田勅任事務改良所長が獄舎に呻吟してゐ



ると云ふ結果もやつぱり此の袖の下のからくりがさせた業であつた。

一ヶ年に二億圓の工事が行はれるとして、その一割が工事請負の談合金だと假りにそろばんをはじくと二千萬圓と云ふことになる。一割の半分五分でも千萬圓と云ふ金だ、百分の一としても二百萬圓だ。此の莫大な金が談合に参加した業者にころげ込んで來ることになるのだから、仲々に事は大きい。鐵道省の工事入札方法は聞くとところに依ると、工事の概算費用が十萬圓迄が鐵道局長の決裁を要するとの事。

更らに百萬圓までの金額になると、建設改良事務所長の権限内に有つてそれ以上はすべて大臣の決裁を要する規定だと云ふことである。

假りにそろばんをはじいて事務建設、改良事務所長の裁量にまかせられる百萬圓以下の工事を請負ふたとしたらその二割の儲けがあつても何十萬と云ふ莫大な儲けになる、況んや何百萬圓、何千萬圓と云ふどえらい大工事を一つ引き受けて請負つて二割の儲けでなくとも一割の儲けでも大した金だ。

工事を請負ふため、早い話が、金儲けが、二十萬兩出來るとしたらその運動金や袖の下を少し位使つても儲けたくなるであらう。其處に云ふに云はれぬいまはしい取引が行はれる結果となるのだつた。鐵道省の局にも、事務所にも、本省にも、指定請負業者の名が登録され一つの工事が有る場合指定業者の中から小工事は二、三名乃至は四、五名大工事になると十名内外の指定請負業者が入札者として指名される。

そこで指定乃至は指名業者は入札に必要な調査費を概算して競争入札と云ふことになるのである。結局、落札者は一人ときまつても、此の入札をする迄にはいづれの業者も、工事の調査をしなければならぬ。

その調査と云ふものが相當に入費を喰ふと云はれ、結局に行つて落札者は一人で利益を占めるのでは他のあぶれた業者は意味ないと云ふ事になる。

つまりは骨折損の草臥儲けと云ふことになる、そこで始めて談合が生まれて來ることになる従つて入札者は、落札にあぶれた他の業者に對して應分の利益の分配と、調査費を分擔して



やる、此れが所謂、談合と云ふのである。

### 一二、濡手で粟の掴み取り

此れだけの事ならば何でもないが今回の國鐵疑獄事件で暴露したところでは、工事の指名されただけで莫大もない談合金がころがり込んで来る様な仕組みになつてゐると聞いてゐる。

従つて入札に對しても録々調査もせずに省で出す設計圖を鵜呑み同様にして、内示された工事の豫算額までせり上げると云ふ様なことまで云はれて来た。

従つて指定請負の列に加はれば先づ早い話が濡手で粟を掴む式のぼろい儲けがあると云ふ結論になつて来る。斯んなことから役人に對しても何かと名目のもとに献金をしやうとする。そこに腐れ縁が生まれて来ると云ふことになるのであらう。

斯うした甚だ宜しくない内状を廓清する爲めに最初の内田氏は大いに肅正を叫び、革正を叫んだが、いつしか金の無いが弱味で、此んな具合のところ引すり込まれたは誠に氣の毒でもある。

ある。

### 一三、内田氏の経歴

借てその内田氏の人と成りは誰れにも一見朗らかな感を與へる明朗内田であつた筈だ。

時たま／＼斯うした事件に連座したのは全く内田個人に對しては氣の毒であるが、自分自らが招いた罪で、誰れをうらむ必要もない譯だ。

内田と云ふ人は色々な意味に於て兎に角話題の人物であつた。

明治十三年十二月茨城縣に生まれ同三十八年、商科大學の前身である東京高商を卒業して三井物産に入社した。

入社十三年餘、船舶部の備船主任となつて月給三十三圓の時に世界戦争が惹起された。此の時内田氏一流の見透しをつけて退社して退職金と他人の援助で内田汽船會社の社長となつた。大戦のインフレ景氣の波に乗つて船を買へば上り買へば上り、上れば賣りして忽ちの中に三



千萬圓の金を手にする様になった。此の頃の成金の豪勢な遊び振りが時折り世間を賑はしたものだ。大正十三年に茨城から代議士戦に打つて出て議政壇上の人となった。

當時金が物を云ふ政界のことゝて、忽ちにして黨で無くて成らぬ存在を示し一步一步、黨内の重要人物となつて來た。

昭和三年には田中内閣時代海軍政務次官となり、昭和七年の犬養内閣には逓信政務次官となった。昭和九年には岡田内閣に鐵道大臣の榮位に就いて政友會を足蹴りにしてしまつた。

その間、水戸の高等學校創立にあたつて百萬圓をぼんと投げ出して大いにつくし、高校の落成式には招かれて大いにきたいた腕で武勇を一型發揮したり、鐵相となつてから機關車に乗つて機關手の辛苦を味はつたり。

或ひは又ボートやスカールに乗つて話題や新聞のゴシップを散布したり兎に角、色々の意味で朗かな男として好感を持たれた。

肅鐵は大いにやらにやいかん、と云つて若し俺れが疑獄に關係ありとしたら切腹すると云つ

て見たり、まさかよもやと皆から見られてゐたのが、蓋をあけて見たら、あゝやつぱり彼れもそうだつたかと云ふ事になつてしまつた。

つまづいてころんで疑惑に充ちて刑務所入りをした内田氏が今度自己の身に降りかゝつた疑雲を公判で如何に辯明するかいづれにしても來年秋は此の國鐵疑獄公判が開かれ、一際が公判先で黑白を争はれることゝ成るであらう。

#### 一四、五私鐵事件の全貌

同づ鐵道疑獄の續職事件でも小川平吉の事件は内田信也の續職事件とは性質が全く異つてゐた。が然しいづれにしても兩者とも元鐵相で有つた點、乃至は兩者とも政友會出身代議士であつた點などが何らか奇異の念を抱かせる。

然かも、小川平吉氏が大審院の最終判決をうけて愈々此れから下獄しやうと云ふその日の姿を新聞がデカデカと掲載した日に、内田前鐵相が、國鐵疑獄の疑惑中の中心人物として檢察當



局の召喚は必然となつたと云ふ見出しで、寫眞をでかくと掲載した點、今や入獄する一足おくれて入獄する等の對照と云ふものが何とはなしに餘りにも皮肉の感に打たれざるを得なかつた。老政治家射山老が時を得ば政友會の總裁として納まることは知れ切つてゐた。

當時小川氏の勢力は事實上、政友會内に於ては副總裁として自他共に許してゐたのであつた。人間の運命はどうころぶものか全く測り知れない。

小川氏が北鐵即ち北海道鐵道八十哩の鐵道線を政府に買収せしめんが爲め北鐵の社長から青山・春日と云ふ人々を介して當時鐵相小川氏が收賄したと云ふ疑惑がかけられたのが一つ。

更らに名古屋市中區南平野町と三重縣、桑名郡大山田村間の十四哩の電軌、電道の敷設の認可にからまつて十二萬圓の收賄をしたと云ふ嫌疑と。

更らに奈良市から同縣の磯城郡櫻井町に至る十二哩の電軌鐵道の敷設認可にからまつて五萬圓の收賄をしたと云ふ嫌疑と。

更らに、博多灣鐵道、西戸崎、宇美間の十七哩を政府に買収せしめんとして時の鐵道大臣で

ある。小川平吉氏に對して五十萬圓の賄賂を約束して結局九萬圓の現金を收賄し、

更らに、東大阪電軌鐵道敷設の免許を得る爲めに十五萬圓を守谷白井等の手を通じて贈賄した。と云ふのが、此の五私鐵事件の外廓的全貌であつた。

何にしても只で買収の話をしやうと云ふ手はない。運動を頼む方では始めから何十萬でも出そうと云ふ腹でかゝつて來るのだ。

それが仲介者の口を通じて萬更でも無い金の話を持ち込めば、金佛、木佛、石佛、でない以上はうんそうか、近頃もつて耳寄りな話だ。場合に依つては買収案は議會を通じてもいゝかなあ、位に考へると云ふのも人間ならば、あながち無理だとも云へまい。

### 一五、政黨凋落の秋

政治的に云へば勿論、死んだ堤清六なんて代議士が金の有るにまかせて貧乏官吏の天岡の鼻先きに金をぶら下げて勳章を賣つて呉れてな交渉をした不届者も政黨人であつたし、五私鐵事



件、偕ては東京市會疑獄、なんでもものが矢つき早やに出合ひ押し合つて來た爲めにまあ政黨政治の凋落に拍車をかけた様のもので有つた。

心有る者は、政黨人の大多數が、邪道に踏み迷ひ、功利主義に囚はれ政權や黨利の爲めには一切の手段と方法を擇まぬ迄に墮落したから此んなことになつたんだ。

政治の道徳的要素は個人と社會と國家とを一貫する正義の尖端と一致しなければならんなどと云つて見たが、仲々以つて口で云ふ様な譯には行かなかつた。

小川平吉氏が疑獄の最中心人物として疑雲暗雲に深く包まれ乍ら檢事局に召喚され取調べを受け遂ひに起訴されるに至つた。その日の様子は宛然、巨木倒る、一巨星地に墜つと云つた感じその儘だつた。

ちやうど内田信也氏が刑務所へ愈々送られると云ふ時、悲壯と云はうか、何と云はうか深く首うなだれ腕組みしながら刑務所行き自動車に乗ろうとするその周圍に新聞記者の一群が居るのを見て淋しげにニツコと愛想笑ひをしたが、とても哀れで見ではゐられなかつたと云ふこ

とを云つてゐた。小川平吉氏も又そうであつた。いよ／＼罪狀明白となつて起訴市ヶ谷に收容と云ふ時、取調べの檢事が嫌疑は深い故起訴收容します。と述べるや悲壯の面持ちで己むを得ないとなづいたと云ふ當時檢事も

巨木倒れる時哀れなりで、私は永い檢事生活中その時始めて『あゝあゝ』と思つたと語つたと云ふ程であつた。

盛んなる時は鐵道大臣と云はれ副總理と云はれた人だつたと思ふと無性に哀れだつた。

それから各私鐵を調べて當局が驚いたことには、き／＼にまさる政界の腐敗してゐたことであつた。誇張して云へば全く支那の政界にも似たりで、寒心に堪へないと云はねばならぬ。

と迄語られる程だつた疑獄の後、又してもその二の舞をした、と云ふのだから困つたと云ふ意外に言葉がない譯である。

今更ら五私鐵の罪科のあとを洗つて書き立て、見ても仕方が有るまいから簡單にしやう。



## 一六、小川氏と内田氏の比較

あの頃やうやく不景氣の聲がぼつくと田舎と云はず都會と云はず吹きまくり始めた頃だつた。

従つて田舎の電氣鐵道の營業狀態などと云ふものも極めて苦しい狀態に置かれたのは事實であつたらう。

斯うした營業狀態の會社が何とかして出来る事なら身代をそつくり政府に買ひ上げて貰ひたい。出来るなら値の有るだけを張り込んで貰ひたいと云ふわけでそれ／＼適當の渡舟人を見つげんと奔走してゐた。

昭和二年の十一月頃北鐵の犬上氏がかねて懇親の青山兼三を介して小川氏に北鐵の買収方の運動を依頼して相當の運動金を出したと云ふ疑惑を持たれ起訴となつたが結局、此の北鐵事件と云ふのは無罪と云ふことになつた。

次が伊勢電鐵の敷設の認可を得る爲めに當時同會社の取締役の熊澤一衛伊坂秀五道氏が春日俊文氏に何とか免許を得る方法なきかと相談を持ちかけた。

その頃名古屋急行電鐵と云ふ競争者が現れて共に敷設の認可を得やうとしてゐた。

従つて尋常一樣の手段でも到底その敷設認可を得ることは困難であるが爲めに少し位の金ならば差し上げてとも云ふ所にまで來たのであつた。そこで小川の秘書格である春日俊文が世話役者となつて敷設の免許を得る様に運動し、結局その認可を取るに至つた。そこで先きの約束の報酬と云ふ十二萬圓の金を受け取つたと云ふ事件であつた。

更らに又奈良電鐵の敷設認可にからまつて此れ又認可を得るが爲めに五萬圓の贈賄をしたと云ふのであつた。

此の外に灣鐵と云はれる博多灣鐵道の買収にからまり贈賄もあり東大阪鐵道の敷設に關して認可を得る爲めの増收賄をしたと云ふ、此の五私鐵疑獄事件と云ふのも皆増收賄事實であつた。凡そ疑獄として此れ程にはつきりと金錢の收受の有つた事件と云ふのも他に類がないので



あらう。

同じ鐵道疑獄事件であつても小川平吉氏の事件と今回の内田信也氏との事件そのものを比較して見るとその金錢の收受のケタも大部相違してゐる。

云もとより事件その物の性質も大部分相違してゐるが同じものさしを以つて此れはこうだあれはあつたとあてはめる譯には行かぬ。何しろ小川氏の方は六十萬圓と云ふ金高であり、

内田氏の方は十五萬から二十萬と云ふ金高である點から見てもスケールは大部違つてゐる。

それに小川氏の方は、何百萬圓と云ふ鐵道を國家に買収させたり或ひは敷設の免許認可を許すと云ふ點であり、内田氏の方は工事の獨占的請負をやらせると云ふのであるから同じ疑獄にし難い。どちらかと云へば内田氏の方が何となく輕やかに進む様に見受けられる。

最も疑獄に良い悪いなどと云はれるべき何ものもないが、最初から成すべからざることを敢てするのだから悪いことには極つてゐるがそれでも同じ疑獄事件を並べて見るとどちらかと云へば今回の疑獄の方が何となく、手輕い様な感じがする。

面白いことには斯うした疑獄の中心人物となつてゐる人、たとへば小川氏にしても、内田氏にしてもだが、最後まで召喚の順番が廻つて來ぬ。従つて何時召喚されるであらうなどと新聞などではやい／＼騒ぎ廻ると、きまりきつた様に、何ら騒ぐにや及ばん、出る所へ出れば自然と黒白がわかるよと、誠に朗かそうに一點何らの疾ましい點無いかの如く云つてゐるが偕て、取調べを受けて見ると、どうもそう語つてゐた様な譯には參らぬらしい。

今度の疑獄事件の召喚前の内田氏なども、今に何もかもわかるよ、君たちがかぶとをぬぐ様になるかも知れん、などと新聞記者を煙にまき乍ら、自分が再召喚される時は、最早かぶとをぬがねば成らぬ様な運命を背負つてしまつてゐるから皮肉だ。

果して檢察當局の起訴した事實が、公判に至つて有罪となるか、無罪となるか今回の疑獄事件は今後尙數ヶ月の後豫審を経て公判に廻つた時始めて明かとなる事であらう。

いづれしても昭和の時代に入つてから、小川氏の鐵相時代から、時の鐵相となつた人が疑獄いづれもその罪を問擬されてゐることは誠に妙なことだ。



## 一七、奇しき因縁魔の邸宅

小川氏は五私鐵疑獄、そのあとの三土氏は帝人疑獄で偽證罪に問はれ今又、内田氏が今回の疑獄に連座してゐる。御難つゞきと云へば別に御幣かつぐ意味でもないが内田氏の今住んでゐる麻布三河臺二十八の邸宅にも何か知ら御難つゞきなどと語る人もないではない。

そんな馬鹿げたことをかついでなどと笑ふものも有るであらうが、内田氏の邸宅の因縁とでも云ふものを事の序に一寸記して見やう。

縁起がいつとか、悪いとか云ふのは、要するにかつぎ屋の云ふことで、そんなものはあてになるものでない一笑されるべきものかも知れぬが、然し事實として現はれることはどうにも仕様のないものだ。

内田氏の住む三河臺町二八の邸宅は、日露戦争の勇將と云はれた。西寛三郎大將が建築した家で、西大將の没後鯨雄男が放蕩をした上旬、邸宅を持ちこたへることが出来なくなつてしま

つて、止むなく人手に渡してしまつた。

その後津輕伯の手に歸したが同伯の没後、元の大藏大臣の井上準之助氏が買ひ取つた。

井上氏が相當長い年月入つてゐたが同氏が本郷の駒本小學校に開かれた駒井代議士の應援演説に行つてかへり際に、例の血盟團の一味小沼正のピストル狙撃に遭遇して、彈丸の露と消えてしまつた。

そのあとを内田氏がゆづり受けて手入れして邸宅としてゐたのであつたが、内田氏が入つてから數年ならずして疑獄は連座刑務所入りと云ふ具合になつてしまつた。

その家に入つたからどうと云ふ譯でもない斯うなる様に運命づけられて來たのだからには仕方のないことであらう。今回の事件程、多岐、多様に亘つた疑獄と云ふのは珍らしいとされてゐる。擴大させやうとするならば次から次へと全く芋づるをたぐる様にそのはてしを知らない程であると云ふことであつた。まだ起訴されず警視廳に留置取調べをうけてゐる疑惑中の人物も相當ある筈で此れが一段落を告げるまでには尙數十日を要するであらう。



... 録目刊既信通演講本日 ...

(厘五料送 錢十價定各)

273	272	271	270	269	268	267	266	265	264	263
木暮武太夫	山本備二郎	村松久義	吉村忠三	小山谷巖	菊池武雄 美濃部建吉	入江俊郎	中山優	松村金助	柳澤健	島村義太郎
非常時豫算案検討	國體の本義に反する天皇機關説を排す	米穀自治管理案の犠牲者は誰か	キエロフ暗殺とロシアの現状	斯くして財政難を突破せよ	美濃部博士の機關説を駁す 天皇機關説の論議	選挙法改正と國民の覺悟	蒋介石の轉向と日支關係	悪性インフレーションは起るか	文化外交の提唱	日滿ブロックにおける石油問題
285	284	283	282	281	280	279	277	276	275	274
今村忠助	川本芳太郎	久田益太郎	石渡莊太郎 松隈秀雄	岡野龍一	中村嘉壽	山縣有光	村松久義	大田爲吉	野崎正憲	藤見三三
南方亞細亞の現情と各地民族の對日動向	北支問題の真相	原田二郎翁の遺業	近代の租税に就て 臨時利得税に就て	更生途上の東北を打診する	東洋の歐米勢力と日本	獨逸の再軍備を通じて 國際情勢の傾向を見る	農漁山村對策解剖	最近の蘇聯邦經濟事情	議會政治の爲政黨の戒心を要す 最近に於ける本邦貿易の現状及其將來	國際問題と榮養問題

# 日本講演通信

購讀料  
 一冊十錢  
 一月三十錢  
 半年八十錢  
 一年一百五十錢

## 日本講演通信の特徴

政治經濟其の他時事問題にして社會人として知らねばならぬ緊要なる事柄は細大漏さず急速且懇切に毎月三回定期に直接讀者に郵送してあるから本通信の愛讀者は時代に取残される心配がない。

一流名士の心血をそつがれたる講演を練達有能なる速記者の手にかけたもの故、文章體と異り専門的難解の問題をスラスラと肩も凝らす容易に讀了し、會得する便宜がある。

千、百の見出し目録を、でかかどと並べた所謂一流雑誌でも眞に讀みごたへのある好篇は其中に一つか二つだ。頁數や目録が多いのがよい雑誌とは限らないその意味で講演通信は無駄がない。

本通信は輕快手頃な四六判、普通三十二頁より四十八頁標準故携帯に便であり、裝幀上特に留意せる綴込式故参考上の保存、索引等に適切である。

購讀の方法  
 購讀料送金は振替口座(東京四〇三八八番)を御利用下さい安全確實です。  
 購讀料は前金に願ひます。  
 雜誌送料は本社で負擔して居ります。  
 住所姓名は御明記願ひます。

特別購讀料  
 一ケ年 金五圓  
 定期刊行物の外本社發行に係る不定期刊行物一切を送本する外、本社主催の講演會座談會等に特別招待をなす。綴込用カペーを年二回贈呈す。



... 信 通 演 講 本 日 ...

(厘五料送 錢十 價定各)

318	317	316	315	314	313	312	311	310	309	308
伍堂 卓雄	米田 實	齋藤 隆夫	大口 喜六	小玉 義雄	勝田 貞次	高神 覺昇	水谷 信雄	清水 盛明	岡野 龍一	五百木良三
獨逸は何處へ行く	局エチオピアの敗戦に伴ふ歐洲の政	軍民一致論の提唱	増税を繞る馬場財政の検討	非常時に於ける燃料問題	經濟日本の進路	人間淨土の建設	廣田内閣を繞る自由主義と國家主義の對立	滿蒙蘇國境事件と日蘇の關係	軍部の非常時觀	極東の危機と日露の宿命
329	323	327	326	325	324	323	322	321	320	319
勝田 貞次	長谷川 了	山本 厚三	與謝野 一秀	松井 石根 高木 陸郎	池尾 芳藏	大和木 佳吉 頼母木 佳吉	池崎 忠孝	秋尾 廉	富田 勇太郎	三枝 茂智
日本資本主義の新段階	南方政策とフィリッピン	義務教育年限延長の種々相	西班牙の動亂と歐洲諸國の動向 スペインの動亂と歐洲の危機	大亞細亞主義と支那 最近支那の動靜	電力國營案に就て	何故に電力を國營にするか 電氣の使命と行政の動向	無條約時代の日米海軍	庶政一新と肅軍問題	最近の歐米經濟事情	内政と外政との關係

... 錄 目 刊 既 信 通 演 講 本 日 ...

(厘五料送 錢十 價定各)

296	295	294	293	392	291	290	289	288	287	286
谷 桐原 茂高 武久	白 羽 秀湖	高木友三郎 エトーマス	中野 江濱	阿子島 俊治	金子 堅太郎	松本 忠雄	伊藤 痴雄	池田 人	生田 果雄 デューイ スミス	本社主催 憲法會 正
産業組合に關する諸問題 商權運動は發展するか	歴史とチャイナリズム	エチオピア問題と世界經濟界の動 き 日本國民に懇ふ	生命線確保の二巨頭 南司令官と松岡總裁	次の政局を支配するは誰か	帝國憲法制定の精神	最近の支那經濟事情	小栗上野介を語る	エチオピアはどうなるか	東西交通史を辿りて 米國資本主義とNRA	斯界の權威者に選舉肅正を聴く
307	306	305	304	303	302	301	300	299	298	297
下中 彌三郎	御手洗 辰雄	永田 秀次郎	梅崎 卯之助	三島 廉夫	岩木 曾夫	大久保 幸次	相馬 雙藏	マール メイソン 久恒	勝 正憲	岡野 龍一
何が健全財政か	滿蒙の現状	偉大なる平凡弘法大師と日本文化	海軍より見たる現下の世界狀勢	北支の獨立と蔣介石政權	誤れる米穀自治管理法案を糾彈す	新興回教世界と日本の使命	商店經營の秘訣	神道の世界的精神 日本精神と佛教	非常時財政と税制問題	北支問題と軍部の動向



325  
573

!!來出々愈輯三第

八聖殿講演集  
第三輯

岡野龍一編

八聖殿講演集第三輯い  
よ／＼出づ！ 發行早々  
より申込み殺到して居り  
ます。賣り切れぬ内に至  
急御註文を願ひます。

- ◇世界的に觀た日本の榮養問 題……………佐伯 矩
- ◇聖徳太子の御鴻業に就て……………黒板 勝美
- ◇回教觀の訂正と研究の必要……………安達 謙藏
- ◇新興回教世界と日本の使命……………大久保幸次
- ◇原田二郎翁の爲人と其の遺業……………久田益太郎
- ◇日本文化と弘法大師……………永田秀次郎
- ◇人格養成と腹……………藤田 靈齋
- ◇神道の世界的精神……………ヲーレン・メイソン
- ◇日本精神と佛教……………鹿野 久恒

東京市銀座西六ノ二海洋ビル  
日本講演通信社發行  
振替東京四〇三八八番

四六二頁  
定價十五錢  
送料六錢

大賣捌店  
森田書房  
啓徳社  
新正堂書店  
東鐵公認鐵道賣店賣捌所  
鐵道保養會  
鐵道弘濟會  
鐵道授産會  
富田報英堂  
川頭春陽堂  
菊竹金文堂

………すまり在に店賣驛・店書名有國全◇  
◇いさ下込申へ社本は際の切賣………

不許  
複製

「内田信也と疑獄秘話」  
昭和十一年十一月十一日印刷  
昭和十一年十一月十四日發行  
定價金十錢  
送料二錢

著者 石田 三郎  
東京市京橋區銀座西六ノ二  
發行人 吉田 謙太郎  
東京市牛込區矢來町三六  
印刷所 清揚社

發行所 日本講演通信社  
東京市京橋區銀座西六ノ二海洋ビル  
電話銀座(57)六六一〇番  
振替東京四〇三八八番



内閣調査官 奥村喜和男著 四六判 二〇〇頁 定價五十錢 (送料四錢)

# 電力國策の全貌

最新刊

!! 版再又 !! 版再  
!! 破突版十 ち忽

頼母木遞相提案の電力民有國營案を繞つて、國有國營論あり、民有民營論あり、今や、電力國策問題は、朝野論争の焦點となれり。果して電力國營是か否か、先づ成案者と謂はれる奥村氏の本著によりて其の眞髓を把握せよ。然らざれば電力國策を論ずる資格なし。庶政一新は電力國策より!!

東京 日本講演通信社 發行